

聖光『浄土宗要集』における本願と行について

——第四十七から第七十算題の構成をめぐって——

郡 嶋 昭 示

一 はじめに

法然面授の門弟、聖光上人（一一六二—一二三八、以下敬称略）の著作として伝わる『浄土宗要集』（以下『西宗要』）は、聖光の講義録とされ、聖光の著作の中で最も大部かつ最晩年の成立であることから、聖光の浄土教思想の集大成といえる著作である。

この『西宗要』は、八十項目にわたる主題（算題）を提示し、問答形式で論じられるもので、その構成を見ると、他の聖光の著作の中に法然『選択集』の構成を模して説示されているものがあるのに対し、『選択集』の構成とは異なった独特の構成を有しているという特色が見られ、この構成には聖光独自の主張が反映されているものと推察するのである。本稿ではこのような見地に立ち、『西宗要』の構成がなぜこのような構成になっているのかを明らかにすることを目的として論じていきたいと思う。

以前私は全体のおおまかな構成と、若干の細部の構成について検討を行い、『西宗要』は①第一→第四十六、②第四十七→第七十三、③第七十四→第八十、の三つの段落に分かれると指摘し、また、第一算題から第八算題までの冒頭の算題では、浄土三部経が他宗で所依とされている経典に劣らないという主張が主旨であることを指摘し、第二十二から第四十六算題までの整理では、善導が所依の経典とした三部の経典の説示によって、他の経典で説かれる種々の問題に対して称名念仏行が全く劣るものではないことの主張にその目的が置かれている⁽²⁾ということを指摘した。これらの検討から、第一段落では浄土三部経という経典の正当性、そしてこれらの経典の説示から成立する称名念仏行の正当性、優位性を主張することがその主題である⁽¹⁾ということを指摘した。本稿ではこれらの検討を踏まえ、引き続き第二段落の検討を行うこととする。

二 第四十七から第七十算題の順序

第二段落の算題の並びを概観すると、説示の流れにおいていくつか不自然な部分が指摘できる。それは第一に第五十二から五十四算題（十悪罪人往生事、破戒人往生事、唯除五逆事）の機根に関する説示が、機根については既に前半の第一段落で論じられているにも関わらずここで再び論じられているという点、そして第二に、第五十八から六十の算題（念仏三昧発得事、念仏信不信機事、往生因縁待対法門事）が不自然な流れの中に配置されているという点である。まずこれらの問題について検討を行いたい。

《再説される機根論の意義》

まず、第一点目の第五十二から五十四の機根に関する算題について検討したい。この点については先にも論じた通り、すでに機根が論じられた第一段落が、經典論を中心に論じられる部分であるというところがその理由であると考えられる。第二段落に取り上げられた機根の問題は、十悪、破戒、五逆という悪行を犯した者を中心とした主題であり、そして「唯除五逆誹謗正法事」の末尾には、「総ノ十悪破戒唯除已下、皆可^レ得^レ意事ノアル也^云」⁽³⁾と云って、この十悪、破戒、五逆の三項目は一まとめとして「意得べきことのある」事項であると論じられているのである。つまり、聖光の中でこの十悪、

破戒、五逆は一つの枠組みで考えられる事柄として理解されており、恐らくは第一段落の經典論の部分で論じたものとは別に、念仏の行相について論じた後に、念仏行において抑止すべき悪について論じ、さらにこれらの悪を修した者でも往生は可能であるため、称名念仏行に励むべきであるという主旨のもと、ここに悪に特化した機根の問題が説示されるに至っていると考えるのである。

さらに、第一段落の第二十九と三十にて説かれる「発菩提心事」「女人往生事」の、「菩提心を発さない者」と「女人」という機根を論じる部分は、例えば法然が菩提心を廢するとした説を批判する諸宗の説に対して、「浄土の四弘誓願」を説き、往生心の中にこれが含まれることを主張して特別菩提心を発すことの無かった者の往生を説き、また『法華經』所説の龍女の成仏の説示に対して、『無量壽經』所説の本願においても女人救済が説かれている点を主張するなど、浄土三部經には他の經典で説かれる教説に劣らない教説があり、またこれに勝るものもあることを指摘し、浄土三部經の正当性および優位性を主張するために示されたものであり、念仏行を修する上の問題として示された悪の問題とはやはり性格が異なるため、主張する目的によって配当される部分が異なつたと考えるのである。

《善導の説示を中心とする算題》

次に第二点目の問題について検討したい。ここで問題となる「念仏三昧発得事」「念仏信不信機事」「往生因縁待対法門事」の三算題の内容を見ると、これらの算題は善導の説示を中心としたものであり、恐らくは後の六十一算題からの道綽と曇鸞の説示に続く主張を行いたかったためにここに配当されたと考えられる。すなわち「念仏三昧発得事」は、善導『観念法門』の説示をもとに論じられる算題であり、称名念仏行によって三昧を得るといふ説示がその主旨である。続く「念仏信不信事」では、冒頭で「問、善導和尚於念仏ノ法ニ立^二信不信ノ二機^一」⁽⁶⁾といつて、善導が信、不信の二機を説いていることを取り上げ、「浄土ノ法門ヲ聞^テ如^レ法ノ行^レ之^ラ者^ヲ以^テ信者ト名^ケ」⁽⁷⁾といひ、浄土の法の如く行ずる者が信者であると主張するのがその主旨であり、「往生因縁待対法門事」では、同じく冒頭で「問、善導和尚、於^二往生極樂ニ待対法^一ヲ積玉^{ヘリ}。若爾^ハ何^{ナル}法門^ヲ以^テ、往生ノ待対^ト為^シ給^フ乎。」⁽⁸⁾といひ、善導の説示に対する問答である。つまり、この三算題は善導の説示について論ずる部分であり、これに続いて道綽の「聖道浄土二門事」、曇鸞の「難行道易行道事」「自力他力事」といふ中国浄土教祖師の説示につながっていると理解できる。つまり、第五十五から六十三までの算題が、称名念仏行は善導、道綽、曇鸞といふ中国の祖師の説示を経て成り立っている

るといふ主張において、一連の繋がりを持つひとまとまりの算題であると考えるのである。

三 本願論の意義

次に中国の祖師の説から続く本願論と、これまでに論じられて来た念仏行との関係について検討したい。聖光はここで十七願から二十願を取り上げて言及している。この三願は法然の門弟の間で解釈が分かれることが従来より指摘されている本願である。聖光は法然が『選択集』で「念仏往生願」といふ⁽⁹⁾第十八願を「称名往生」とし、「念仏」とは称名念仏であることをここで主張し、そして他の門弟等によって「諸行往生の願」とされることの多い第十九願を「是^ラ諸行往生ノ願^ニ取^ラハ、来迎ノ願^ハ何^レ處^ニアルソヤ」といって来迎の願とし、さらに続く第二十願では「係念往生ト云^フ名目^ヲ以^テ知^ヌ、順次往生^ニ非^ス」⁽¹¹⁾といつて順次の往生を否定し、称名念仏によつて阿弥陀仏の来迎を得、速やかに浄土に往生することができるといふことをここで確認しているのがわかる。また「四誓事」では四十八の誓願を立てた事に対する「我今超世願」で始まる偈文について、「此願若剋果」の文を踏まえて「四誓」とすべき事を述べ⁽¹²⁾、また「選択本願事」で、この本願は二百一十億の国土の中から、法蔵菩薩の意に叶うものを選び取つて誓われた誓願であることを述べ⁽¹³⁾、法蔵菩薩の誓願がい

かに高尚であるかを主張し、称名念仏行の正当性を加えているのである。つまり、ここで阿弥陀仏の本願を取り上げて、諸行往生ではなく念仏による往生を説き、それが選択された本願に論じられていることを主張し、インド中国の大師に引き続き、称名念仏による往生が、仏・菩薩・大師の説示を経て成立しているということの主張をしているのである。

四 おわりに

以上の検討をふまえて構成を考えると、釈迦によって説かれた称名念仏行について、これを修する上での具体的様相、その上で厭うべき悪行を示し、そして今まで述べてきた称名念仏行が、菩薩、インド、中国の大師の説示を経て成立した行であり、阿弥陀仏が二百一十億の国土から選択して誓われたものを基底とするということが語られていることになる。

つまり、『選択集』で冒頭に述べられる聖道浄土二門がこの後半部分に説かれるのは、『西宗要』全体が善導の教説に基づいて構成されており、道綽の説示である聖浄二門を中国浄土教祖師の説示をまとめて説く部分に配当したために冒頭で論ずることが無かったと考えられるであろう。それは、法然が「偏依善導一師」とした立場を継承し、そしてそれを主張する姿勢から、この『西宗要』の構成が成立したといえるのではないだろうか。

そして後のまとめの三算題、即ち「念仏出世本懷事」「三世諸仏浄業生因事」「念仏有五種増上縁事」は、それまでに論じてきた全てが釈迦出世本懷の教説であり、諸仏に通ずる行であり、そして五種の増上縁のある行であるということを経体系的に示すことを目的としていると考えられるのである。

- 1 拙稿「聖光の浄土教思想に見られる對他宗的要素について―三部経の扱いを中心に―」（『仏教論叢』第五十四輯・二〇一〇年）。
- 2 拙稿「聖光『浄土宗要集』における浄土三部経の説示について―第二十二から第四十六算題の構成をめぐって―」（『浄土学』四八輯に掲載予定）。
- 3 『浄全』一〇・二一七頁・下。
- 4 注2拙稿参照。
- 5 「念仏行者三心具足、念仏行成就、其ノ所期、見仏三昧之故、三心具足、念仏申問、見、給也。」（『浄全』一〇・二二〇頁・上）
- 6 『浄全』一〇・二二三頁・上。
- 7 『浄全』一〇・二二三頁・下。
- 8 『浄全』一〇・二二三頁・下。
- 9 法然は『選択集』第三章で「念仏往生願」（『昭法全』三二七頁）としているなど、各所でこう呼称している。
- 10 『浄全』一〇・二二九頁・上。
- 11 『浄全』一〇・二二九頁・下。
- 12 『浄全』一〇・二二九頁・下。
- 13 「法蔵比丘ノ思惟、我成仏時、我浄土莊嚴事、可レ有様、諸仏ノ浄土ノ意、不レ叶選ヒ捨テ叶レ心選択シテ也。以レ之ヲ為シ玉フナリ、極楽浄土ノ莊嚴。」（『浄全』一〇・二三〇頁・下）

〈キーワード〉 日本浄土教、聖光、浄土宗要集、法然浄土教

（大正大学総合佛教学研究員）